

第6回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「思い出の思い出は風の庭」

香川県 県立三木高等学校 2年 黒田佳奈



賢治のまちから
高校生★童話大賞

優秀賞／銀の星賞

香川県 県立三木高等学校 二年 黒田佳奈

『思い出の思い出は風の庭』

「銀杏の花言葉って知ってる？」

「花言葉？ 木なのに花言葉があるの？」

「そうよ。銀杏の花言葉はね…」

お婆ちゃんは木漏れ日の中とでも綺麗に見えた。

「まだ起きてなかつたの。早く準備しなさい。今日は忙しいんだから、ゆつくりできないのよ」

そう言つて真っ黒い服に身を包んだ母さんはパタパタとスリッパの音をさせて行つてしまつた。香水の臭いが鼻に残つた。時計を見ると午前七時すぎ。まだ時間は三時間もある。

その日はお婆ちゃんの三回忌だつた。大好きだつたお婆ちゃんが亡くなつて三年になるんだと思つてまた気が重くなつた。時間が経つてどんどん私の中から消えていく面影。私の頭を撫でてくれたあの優しさだけが胸の中に残つてゐる。法事が無くなるわけではないけれど、私はゆつくりとベッドから起きあがつた。涼しくてもむかつくほど気持ちよかつた。

お婆ちゃんの家は私の家の隣にあつて、親戚や近所の人の黒い集団ができていた。この家は独りで住むには大きすぎると思う。私の両親は共働きだったので、小さな私の世界は学校とこの大きな家だけで十分だつた。

古びた玄関をくぐつた。お婆ちゃんがいた頃の染みついた線香の匂いは香水や化粧品の臭いで薄まつていた。もうここにもお婆ちゃんはいなかつ





溜息のように呴いて背後の銀杏にもたれ掛かった。後ろに大きな存在を感じて少し安心した。この銀杏はお婆ちゃんの家の裏にあって、遠くから見てもグンと飛び出して見えるほど大きい。足下に広がった円形の陰が少し離れた所まで広がっていた。風が吹いて陰がグニヤリと形を変えた。しばらく静かな庭でぼんやりと風と陰と音を感じた。銀杏が見守るこの庭をお婆ちゃんはよく手入れしていたし、いなくなつた今でも少し荒れた感じはあるけれど草の一本一本までお婆ちゃんとその思い出が染み込んでいるように温かい。お婆ちゃんを思い出して小さく息を詰めた。例え一人になつても逃げ出すべきではなかつたのに。耳を澄ませてもあの低い音は聞こえない。どうやら終わつてしまつたらしい。お婆ちゃんに申し訳ない。ゆつく

しばらくしてお坊さんが来て読経が始まった。母さん達女性陣は台所でお茶の準備をしていていなかつた。私の周りはおじさん達でいっぱいだつた。その声は腹に響くように低くて子供には到底出せない音だ。低い声の波の中で私に頼るものは何もなかつた。今日もお経が始まつても高いのは私の声だけだつた。不安になつて、周りを見ると面倒そうに胡坐あぐらを組んでいるのが目に入った。部屋をうすく満たしている線香の匂いに混じつて煙草たばこの煙が鼻にかかつた。お婆ちゃんは煙草が苦手だつたのに。みんな知つてゐるはずなのに。私の声一つだけ。ピントがずれている気がした。低い声が部屋を満たして右からも左からも上からも私を押しつぶそうとする。名前の分からぬ感情がグッと湧いてきた。堪えるために下を向いた私の背中を近くにいたおじさんが大きな手でさすつてくれた。でもそれが更に私を動搖させた。もうこの手は私と同じ気持ちじゃない。そう思つた瞬間、私はその手を振り払つて逃げるよう部屋を飛び出していた。

「どうしよう…」

た。



ガサツと目の前の植木が揺れた。でも頭上の銀杏は静かだつた。風ではないのだろう。植木を眺めているとニユツと灰色のネコが顔を出した。力チツとその満月のような目と視線があつた。逃げるかなと思つたけれどネコは気にせずに風と同じ音をさせて植木から出てきた。そのまま私なんかいないようになしにスルスルと歩いて来て、私の隣、手を伸ばせば届きそうなくらい近くに腰を落ち着けた。しばらく時間が止まつたようだつた。チラリと目を向ければネコは私の事なんて気にもせずに堂々と^{くつろ}寛いでいる。汚れているのか、それが地毛なのかネコは全身濃い灰色だつた。決して若くはない顔で、髭と目の上の毛だけが真っ白だつた。でもあんまりにも静かでネコは完全に庭に馴染んでいた。寧ろ法事を飛び出してきた私の方が居心地が悪い。でもあの冷たい部屋には戻りたくない。途方に暮れて吐く息の全てが溜息になつた。

「いいねお前は。辛い事なんてないんでしょ」

ネコは今まで通り私の言葉なんて気にもせずに聞き流してくれると思つた。だからこそ私はこんな事が言えた。しかしネコは初めて私の方を見て反応した。

「そんなこと、ないわ」

しゃべつた。口を小さく動かして、ネコがしゃべつた。でもそれがあんまりにも自然で不思議と違和感がない。それでも私は驚いて自分の耳を疑つた。ネコは私の方を見ていて、まるで私の反応を伺つていてるようだつた。どうしよう。どうすれば、いいんだろう。大声を出せば障子の向こうから大人達が駆けつけてくれるだろう。そして何よりこのネコは逃げて行くだろう。先ほどとは違つてネコは寛いではない。いつでも動けるように身体を緊張させていた。判断を私に任せてくれているようだ。

私は意を決して大きく息を吸い込んだ。ネコは体重を前に傾けた。風が止まつて、時間も止まつたように感じた。私はそのまま息を吐き出

した。

「何があるので、辛い事つて

ネコがしゃべってから随分間があった気もするが実際はそうでもなかつたのだろう。でも私はネコが言つた。「そうでもないよ」という言葉を思い出すのと、それにに対する返事を考えるのに少し時間がかかった。ネコはまた庭を眺めるように座り直した。

「忘れてしまうことが辛いわ」

「忘れる？ 何を忘れるの？」

「今まで何度も死んでいく友達を見てきたの。その子達を忘れて笑っている自分が居ることが辛い」

私もネコも眼を合わさなかつた。ぼんやりと夏の近づいた庭を眺めながら話した。向かい合つて話そうかなとも思つたけれどやつぱり奇妙な気持ちになつてやめた。風が吹いて私の髪とネコの毛を揺らした。

それは今まで私が感じていたものと、きっと同じだと思った。例え隣にいるのがネコでも、力が抜けるように安心した。

「あなた、なんていう名前？」

「名前はないの。私たちは名前で呼び合つたりしないのよ」

ネコは白い髪を揺らして答えた。

「なんだ…」

「同じ場所にいるけど、生きている世界が違うのよ。私が見ているこの庭と、あなたが見ているこの庭はきっと違うわ」

ネコはクスクス笑つた。ネコの方に顔だけ向けると、ネコもこつちを見ていた。

人間とネコ。風が吹いた。風の音は木々のざわめきだ。命を揺らす音だ。きつとこの瞬間私たちの感じている世界は同じだつただろう。

「風だね」



賢治のまちから 高校生☆電話大賞



「気持ちいいね」

そしてどちらともなく笑い出した。

「あなた最近元気になつてくれて良かつたわ」

土曜日の朝出勤前、化粧をきちんとした母さんがぽつりと言った。法事の後飛び出して行つたことは、後から聞いたのだろう。その後のことは何も言わなかつた。

「楽しいことあつたの？」

「うん、まあね」

「そう。ああ、もう時間だわ。片付けだけお願ひね。行つてきます」

あの日以来ネコとは何度か会つて話をした。よく話題に上がつたのはお婆ちゃんのことだった。ネコはお婆ちゃんはよく撫でてくれたと嬉しそうに話してくれた。ネコと会うのは決まって銀杏の下だつた。あの場所ならネコが人間の言葉を話しても不思議ではない気がしていた。窓を開けると一段と緑を濃くした銀杏が隣の家からグンと伸びていた。今日も会えるかもしれない。

あの日「また、会えるかな」と言つた私の言葉にネコは呟くように答えた。
「約束はしないでおきましょう。そうね・また風の吹く日に」

そう言つてネコは植木の中へと消えていつてしまつた。

私は午前中に宿題を終わらせて小さな水筒にミルクを入れて、もう使わなくなつた小皿を持って家を出た。道に誰もいないのを確認してから、まるで泥棒のようにこつそりお婆ちゃんの家へと入つた。奥へ進むと銀杏を中心とした庭が変わらずそこにあつた。

「待つた？」

「いいえ、そうでもないわ」

銀杏から返事があつた。私は銀杏の真下へ行つて、その太い幹を見上げた。

光と陰でキラキラ揺れる葉の中にネコはいた。灰色の毛が今は銀と黒に揺れて神秘的だつた。ネコは笑つて結構な高さからヒラリと難なく飛び降りた。

「久し振りね、元気にしてた？」

見とれている私にネコの方から声がかかつた。

「うん、元気。そうだ、ちょっと待つて」

私は家から持つてきた小皿にミルクを注いでネコの前に置いた。

「はい、どうぞ」

「いつも有り難う」

私はどういたしましてと答えて、余ったミルクをコップに入れて飲んだ。ネコは舌を使って器用に舐めた。本当にそんなので飲めているのかと思つたけれど、話している間に綺麗に無くなつていた。

「ごちそうさま」

ネコは空になつたお皿に向かつて丁寧に頭を下げた。そう言えばお婆ちゃんも手を合わせながら頭を下げるていた。

「それ、お婆ちゃんもやつてたよ。どうして頭を下げるの？」

ネコは少しだけ答えをと言うより言い方を考えて

「命を貰うから」

と、短く答えた。風が吹いてネコに降る木洩れ日が揺れた。ネコは一つの命としてそこにいた。

夕暮れが近づく気配で私たちは別れた。私は家へ、ネコは只ただのネコへと帰る。植木へと向かうネコの背に私は声を掛けようとした。「また風の吹く日に」と。次に会うための大切な約束だつたから。するとネコは遮るように風の匂いをかいで私の方を振り返つた。

「残念だけどしばらく会えそうにないわ。雨の季節が来るみたい」
「そうなの？」



「私たちはこう言うことに敏感だから」

ネコは苦笑すると、前足を舐めて顔をこすつた。そうしていると本当にネコらしい。ネコは手の代わりに尻尾をヒヨンと振つて植木の中へと入つて行つた。

猫が顔を洗うと雨が降る。昔からそう言われているのを証明するようにな日の日から雨が降り始めた。同時にTVが梅雨入りを告げた。しばらく週間天気予報に傘マークが並ぶだろう。日に日に洪水や土砂災害のニュースが増えて、学校でも警報時の対策を説明された。

それはTVの中だけの世界ではなくて通学路の途中にある大きな川は目に見えて増水していた。まるで日本にいることを忘れさせるように轟々と茶色に濁つた水を海へ押し出していた。その水一滴にまで命が吹き込まれたように、激しい流れは大きな叫び声を上げていた。この中にネコが巻き込まれているのではなかと悪い予感が頭をよぎつた。

雨は3週間後。ピタリと止まつた。梅雨明けがあまりにもいきなりだつたので肩すかしを食らつたような気がした。朝、窓から入つてくる光が久々に眩まぶしくて、窓を開けると昨日までボタボタ泣いていた空から雲が一つも無くなつていた。本当の青だつた。世界が空に飲み込まれるのではないかと思わせる、迫つてくるような空だつた。夏になつたんだ。目を閉じて耳を澄ませると、銀杏のざわめきと揺れる木洩れ日が瞼まぶたの裏でチカチカした。

七月半ば。学校では夏休みに向けて面談が行われていた。生徒は午前中で授業を切り上げて帰るので梅雨明けと同時に学校内はウキウキした雰囲気に包まれた。それは私も同じだつた。やつと会える。今週末、庭に行つて見よう。梅雨の間の不安はいつの間にか期待へと変わつていた。

ネコは私が学校へ行つていることを理解していたので平日は庭には居な





い。だからその日は午前授業だつたけれど帰らずに近所の図書館で夏休みの宿題と格闘することにした。図書室の中は静かで涼しかった。勉強に来た大学生と新聞を読むお爺さんで自習用の机はほぼ満席だつた。幸いガラス戸に一番近い席が光に包まれてポツンと空いていた。図書室の裏側は外からでも入れる小さな広場になつていて、その席からは広場全体を見ることができた。誰もいなければ淋しい感じはなかつた。一面の芝生は空に向かつて。ピンと伸びているし、何本か植わつてある木は逆光で真っ黒に見えた。微かに聞こえるジージーギヤンギヤンという蝉の声。芝生に半分埋もれるように土をつつくスズメ。夏を形にしたらきつとこんな感じだ。そこにある命の全てが空へと手を伸ばしているようだつた。飽きることのない命の広場。眩しい日の光。私はしばらく見とれるように眺めていた。

ふと木の陰、私の視界の隅に黒い影が入つてきた。気になつてよく見るとネコだつた。お婆ちゃんの庭でしか見たことがなかつた灰色のネコだつた。自然に顔が弛むのを感じた。無事だつたんだ。少し瘦せていて、動きに合わせて肋骨が浮き出している。今度会う時は何か食べるものも持つて行つてあげよう。きっと初めてミルクをあげた時みたいに鼻をヒクヒクさせて驚くだろう。それから…

私はふと違和感を覚えた。ネコの周りの空気がピンと張りつめていた。ネコは体制を低く、まるで芝生の陰のように動いた。『狩り』と言う単語が何処からか湧いてきた。認めたくなかった。けれどネコの視線は針のように一羽のスズメに突き刺さつていた。まるで映画を見ているように私の周りの世界が無くなつた。もう蝉の声も聞こえない。時間が止まつたのかと思つた。風が吹いた。スズメの茶色の翼。芝生の緑。夏…

一瞬だつた。灰色が動いて私の目は残像だけを映した。スズメがどうなつたかなんて見えなかつた。芝生の中に押しつけるネコの頭だけがスズメが足搔いているのを示した。私は動けなかつた。すぐに広場に静寂が戻つ

賢治のまちから 高校生☆電話大賞



てきた。広場は非道く暗い。ネコが顔を上げた。芝生から見える茶色の小さな羽根。もうあの翼が風を掴むことはない。

ネコはスズメを見下ろしていた。そして不意に眼を閉じて頭を下げた。私はハツと息を詰めた。頭の中に一つの情景が見えた。お婆ちゃんが食事をする時。ネコがミルクを飲んだ時。食べ物に向かって頭を下げていた。食べ物に向かつて。

私は荷物を引つ掴んで図書館から逃げていた。ドタバタと煩い音がして周りの人の視線が飛んできた。五感で感じるべき情報が私の中に留まらずに流れていた。ただ私の中には、ネコがこれからあのスズメを食べるという事実だけだった。

ガラス戸から目を逸らした最後の瞬間、ネコと目が合った。鋭いネコの視線が私を捉えてしまった。あの満月のような優しい瞳を私はとても好きだつたのに：

何時間が過ぎただろう。一階で母さんが帰つてくる音がした。涙が知らない間に流れて頬がガビガビになつていた。窓から入る西日が眩しくて目を閉じた。眠つてしまいたい。そうすれば目が覚めた時、夢だったと思えるのに。でも目を閉じるとあの情景が頭の中を一杯にした。急いで目を開けて振り切るようにカーテンに手を伸ばした。

窓の向こうに灰色が見えた。夕日に紅く染まりながらネコは塀の上に静かに座つていた。逃げようかと思つた。窓を閉めようとした時ネコの声が耳に届いた。久し振りに聞いた優しい聲音。縋るように耳を傾けている自分がいた。

「生きている世界が、違うのよ」

「私は…」

「あなたが見たものと、私がしたことの意味は全然違うの」

「…そんなこと、分からぬよ…」

ポロリと溢あふれてきたものが私の唇から流れて形になつた。

「分かるわけないわ。あなた、スズメを殺したのよ。命を奪つたのよ。一つの…大切な命なのよ」

「私はこうやつて生きてきたの」

「スズメ一羽の命よ。どんな理由でもそんなこと…許されるわけない」

私は勢いに任せてカーテンを閉めた。声は届くのに姿が見えるのに、ネコとの距離は遙か遠い。

「お願ひ、最後に一つだけ聞いて」

ネコの声がカーテンの向こうから聞こえた。口調はいつもと変わらない穏やかさを帶びていた。私はずっとこの声を聞いたたのかもしれない。

「私はあなたに謝れない。これが私の世界だから。あなたが私を嫌いになるのは仕方のないことかもしれない。でも、もしいつか今日のことを思い出して、考え方が変わったのなら銀杏の所へ来てね。お願ひね…サヨナラ、今はあなたの世界で生きてね」

ネコが去つていく気配がした。私の中で何かが音を立てて落ちてしまった。

優しい風に頬ほおを撫でられて顔を上げるとお婆ちゃんの家の前だつた。秋になつたこの家は茶色と赤と黄色の世界に埋まつてゐる。あれ以来一度も入つてない。見上げる銀杏は濃い緑を鮮やかな黄色に変えていた。風が吹いて銀杏はガサガサと乾いた音を立てる。あれからネコはどうしただらう。今なら理由を聞いてあげられるかもしれない。風に任せて道を転がる落ち葉のように私はぼんやりとお婆ちゃんの家の門をくぐつた。足は自然と庭へと向かう。思つた通り誰も手入れしていなない庭は一面草原のようになつてゐる。淋しい。時間はどんどんお婆ちゃんを連れて行つてしまふ。小さ



な虫たちが見知らぬ侵入者に驚いて逃げて行く。私は銀杏を目指す。途중何度も足や腕を草で切つてしまつたけれど、少しも気にならない。銀杏の下は開けていた。

それは、苔の生えた太い幹の根元にいた。きっと何も知らない人が見たら気付かなかつただろう。いつだつて穩やかで静かだつたから。私は歩く。足に伝う血の感覚だけが鮮明だ。真つ赤な血。生きている証。

「やつと、会えたね」

灰色のネコは静かに、そこに横たわつてゐる。死んでいた。紛れもない死がネコの上に降り立つてゐる。命が尽きるべくして尽きていた。落とし物が見つかつた。周りの世界が輝きだす。スズメが死んでしまつた瞬間に見えなくなつた私の周りの命。この庭も川も銀杏も私も生きている。お婆ちゃんもスズメもネコも一つの命だつた。ネコと出会つてから見えるようになつた、たくさん命の輝き。私は膝を着いてネコを撫でる。初めてその身体に触つたことに気付く。サラサラとした手触り。少し強く触ると硬い身体に当たる。毛並みは温かいのにネコは硬くて冷たい。生きていた時はどんなに柔らかく温かかつただろう。お葬式のお婆ちゃんと重なつた。最後に触れたお婆ちゃんの冷たい肌。

視界が歪ゆがんだ。泣きそうと思うのと灰色の毛に水滴が落ちるのは同時だつた。ネコの灰色の毛並みに吸い込まれていく涙。止まらない。目の前で死んでいったスズメの命。目の前で死んでいるネコの命。何の違いもない。いつでも私は泣くことしかできない。猫はちゃんと分かつてゐた。「命を貰うから」と。私は非道いことを言つてしまつた。

私はしばらく泣いた。今この胸の痛みをいつか忘れてしまう日が来るかもしれない。時間がお婆ちゃんの思い出を薄れさせていくように、気付けば今日のことを忘れて笑つてゐるかもしれない。「忘れてしまうことが辛いわ」確かに、辛いね。私には砂時計の砂を止められないもの。でも私は

賀治のまちから
高校生☆童話大賞



できるだけ覚えていることにするよ。あなたと交わした大切な時間。この胸の痛みと共に。私も一つの命としてここにいるのだから。

庭に夕日が差した。銀杏の葉が燃えるような金色に光った。

「銀杏の花言葉は、鎮魂っていうんだよ」

私は頬に伝う涙をぬぐつた。立ち上がるよ。あなたが教えてくれた命を精一杯生きるよ。だから、ごめんなさい。それから、ありがとう。

風が吹いて金色の扇がネコの上に一枚落ちてきた。

「それじゃあ、また、風の吹く日に」